

ルンペルシュチルツヒェン

グリム兄弟 楠山正雄訳

むかし、あるところに、こなやがありました。水車小屋でこなをひくのを商売にして、まずしくくらはいましたが、ひとり、きれいなむすめをもっていました。

ところで、ひよんなことから、このこなやが、王さまとむかいあって、お話することになりました。そこで、すこしばかり、ていさいをつくろうため、粉屋はこんなことをいしました。

「わたくしに、むすめがひとりございますが、わらをつむいで、金にいたします。」

王さまは、こなやの話を聞いて、

「ほほう、それはめずらしいげいとうだね。ほんとうに話のとおり、おまえのむすめに、そんなきようなことができるなら、さぞおもしろいことであろう。では、あした、さつき城へつれてくるがいい。ひとつ、わたしがためしてみてやろう。」と、いいました。

さて、むすめが、いやおうなし、王さまのところへつれてこられると、王さまは、むすめをさつき、わらのいっばいつんであるおへやにいれました。そうして、糸車とまきわくをわたして、こういいました。

「さあ、すぐと、しごとにかかるがよい。今夜からあしたの朝はやくまでかかって、このわらが金につむげなければ、そちのいのちはないものとおもうがよいぞ。」

こういいのこして、王さまは、じぶんでへやの戸に、じょうをかってしまいました。むすめは、ひとりぼっち、あとにのこりました。

さて、むすめは、ぼつねんとそこにすわったきり、いったいどうしたらいいのか、とほうにっていました。わらを金につむぐなんて、そんなこと、まるでわかりようはありません。だんだん、心配になってきて、とうとう、たまらなくなると、むすめはわっと泣きだしました。

するうち、ふと、戸があきました。ひとり、豆つぶのように小さな男がはいつてきて、こういました。

「こんばんは、こなやのおじよっちゃん、なんでそんなになしそうに泣きなさるえ。」
「まあ、あたし、わらを金につむがなければならぬのだけれど、どうしてするものかわからないの。」と、むすめはいいました。

すると、こびとがいました。

「わたしが、かわりに、それをつむいであげたら、なにをほうびにくれるえ。」

「この首かざりをね。」と、むすめはいいました。

こびとは、首かざりをもらうと、糸車の前にすわりました。ぶるるん、ぶるるん、ぶるるん、三どまわすと、まきわくは、金の糸でいっぱいになりました。それから、こびとは、また二ばんめのまきわくをかけて、ぶるるん、ぶるるん、ぶるるん、三どまわすと、三どめで、またふたつめのわくが、いっぱいになりました。こうやって、あとから、あとからとやっていくうち、朝になりました。もうそれまでに、のこらずまきわくは、いっぱい金の糸になっていました。

お日さまがのぼると、もうさつそく、王さまはやってきて、へやじゅうきらきら光っている金をみて、びっくりしました。すると、よけい、いくらでももつと金がほしくなりました。

王さまは、また、こなやのむすめをもうひとつの、やはりわらのいっぱいである、しかもずっと大きなおへやへ、つれていかせました。

そうして、こんどもまた、いのちが惜おしかったら、ひと晩でこれを金の糸につむげと、いいつけました。

むすめは、どうしていいかわからないので、泣いていますと、こんどもやはり戸があいて、そこにこびとが姿をあらわしました。そうして、

「わらを金につむいだら、なにをわたしにほうびにくれるえ。」と、いいました。

「わたしの指にはめているゆびわ。」と、むすめはいいました。

こびとは、ゆびわをもらうと、また糸車をぶるるん、ぶるるん、まわしはじめました。

そうして、朝までに、のこらずのわらを、きらきら光る金の糸にしあげました。

王さまは、うずたかい金の山をみて、にこにこしながら、でも、まだまだそれだけではまんぞくでなくなりました。それで、またまた、わらのいっぱいつんである、もっと大きいへやへ、こなやのむすめをつれていかせました。そうして、

「さあ、今晚のうちに、これをしあげてしまうのだよ。そのかわり、しゅびよくそれをしとげれば、わたしの妃きにしてあげる。」と、いいました。

「よし、それがこなやのむすめふぜいであるにしても、それこそ世界じゅうさがしたって、こんな金持つまの妻はないからな。」と、王さまは考えていました。

さて、むすめがひとり、ぽつねんとしていますと、れいのこびとは、三どめにまたやってきて、こういいました。

「さあ、こんどもわらを金につむいであげたら、なにをほうびにくれるえ。」

「あたし、もう、なんにもあげるものがないわ。」と、むすめはこたえました。

「じゃあ、こういうことにしよう。王さまのお妃におまえがなって、いちばんはじめにうまれたこどもを、わたくし「#「わたくし」は底本では「わたしく」にやくそくくれると約束おし。」

(どうなるものか、さきのことなぞわかるものではないわ。)と、こなやのむすめは考えていました。

それに、なにしろせっぱつまったなかで、なにをほかにどうしようくふうありません。それで、むすめは、こびとのぞむままの約束をしてしまいました。そうして、こびとは、三どめにまた、わらを金につむいでくれました。さて、そのあくる朝、王さまはやってき

てみて、なにもかも、ちゅうもんしたとおりにいつているのがわかりました。そこで王さまは、むすめとご婚礼こんれいの式をあげて、こなやのきれいなむすめは、王さまのお妃になりました。

一年たつて、お妃は、うつくしいこどもを生みました。そうして、もうこびとのことなんか、考えてもい wasn't でした。すると、そこへひよっこり、こびとがへやの中にあらわれて、

「さあ、約束やくそくのものをもらいにきたよ。」と、いいました。

お妃はぎくりとしました。こどもをつれて行くことをかんにんしてくれるなら、そのかわりに、この国じゅうのこらずのたからをあげるから、といったたのみました。でも、こびとは、

「いんにや、生きているもののほうが、世界じゅうのたからのこらずもうより、ましじやよ。」と、いいました。

こういわれて、お妃は、おろん、おろん、泣きだしました。しくん、しくん、しゃくりあげました。それで、こびとも、さすがにきのどくになりました。

「じゃあ、三日のあいだ待つてあげる。」と、こびとはいいました。「それまでに、もし、わたしの名前をなんというか、それがわかったら、こどもはおまえにかえてあげる。」

そこで、お妃は、ひと晩じゅう考えて、どうかして、じぶんの聞いて知っているだけの名前のこらずのなかから、あれかこれか、考えつこうとしました。それから、べつにつかいの者をだして、国じゅうあるかせて、いったい、この世の中に、どのくらい、どういう名前があるものか、いくら遠くでもかまわず、のばせるだけ足をのばして、たずねさせました。

そのあくる日、こびとはやってきました。お妃は、ここぞと、カスパルだの、メルヒオールだの、バルツェルだの、でまかせな名前からいいはじめて、およそ知っているだけの

名前を、かたはしからいってみました。でも、どの名前も、どの名前も、いわれるたんびに、

「そんな名じゃないぞ。」と、こびとは首をふりました。

ふつか

二日めに、お妃は、つかいのものに、こんどはきんじょを、それからそれとあるかせて、いったい世間では、どんな名前をつけているものか聞かせました。そうして、こびとがまたくると、なるたけ聞きなれない、なるたけへんてこな名前ばかりよつていいました。

せけん

「たぶん、リップンビーストっていうのじゃない。それとも、ハメルスワーデかな。それとも、シュニールバインかな。」

でも、こびとはあいかわらず、

「そんな名じゃないぞ。」と、いつていました。

さて、三日めになったとき、つかいのものはかえつてきて、こういう話をしました。

「これといって、新しい名前はいっこうにたずねあたりませんでした。ある高い山の下で、その森を出はずれたところを、わたくしはとりました。ちょうどそこで、きつねとうさぎが、さようなら、おやすみなさい、をいつておりました。そのとき、わたくしはふと、そのへんに一けん、小家をみつめました。その家の前に、たき火がしてありまして、火のまわりに、それはいかにもとぼけた、おかしなかつこのこびとが、しかも一本足で、ぴよんぴよこ、ぴよんぴよこ、とびながら、はねまわつておりました。そうして、いうこと、

きょうはパンやき、あしたは酒づくり、

一夜あければ妃のこどもだ。

はれやれ、めでたい、たれにもわからぬ、
おらの名前は、

ルンペルシュチルツヒエン。

と、こうもうしておりました。」

つかいの者の話のなかから、こびとの名前を聞きだしたとき、お妃はまあ、どんなによろこんででしょう。みなさん、さっしてみてください。さて、そういうそばから、もうそこへ、れいのこびとはあらわれました。

そうして、「さあ、お妃さん、どうだね、わたしの名前はわかったかい。」と、いいました。

お妃はわざとまず、

「クンツかな。」

「ちがうわい。」

「では、ハインツね。」

「ちがうわい。」

「じゃあ、たぶん、おまえの名前は、ルンペルシュチルツヒエン。」

「悪魔あくまが話したんだ、悪魔が話したんだ。」と、こびとはさけびました。そうして、腹あなだちまぎれに、右足で、したか大地をけりつけると、からだごとうずまるくらい深い穴がありました。それから、いかりたけつて、両手に左足をひっぱるひょうしに、じぶんでじぶんのからだを、まっふたつにひきさいてしまいました。

底本…「世界おとぎ文庫（グリム篇）森の小人」小峰書店

1949（昭和24）年2月20日初版発行

1949（昭和24）年12月30日4版発行

※「旧字、旧仮名で書かれた作品を、現代表記にあらためる際の作業指針」に基づいて、底本の表記をあらためました。